

農山村地域に定住する作家の居住選択行動と居住地評価に関する研究

A Study on the Local Artists Immigration and the Evaluation
of the Residential Environment in Rural Community

高村 恵多**・吉武 哲信***・軍神 宏充****

By Keita KOHMURA, Tetsunobu YOSHITAKE and Hiromitsu GUNSHIN

1. はじめに

著者らは、コミュニティの活性化において外部参入者との交流が重要であるという認識に基づき、農山村地域に定住する作家（陶芸、木工芸、染織などで主に生計を立てている者）とコミュニティの活性化との関係に関する研究を行なってきた^{1)~4)}。これらは、地元住民と作家の交流とその影響に関するもの^{1),3),4)}および、作家の存在に関連した地域外部者との交流の生成に関するもの²⁾に大別できる。しかし、作家自身の居住地選択行動や居住地環境の評価、また今後の転出意向についての分析は未だ行なっていない。これらを明らかにすることは、作家の誘致という観点から重要であろう。

そこで、本研究では一連の研究における宮崎県東諸県郡綾町、および福岡県糸島郡志摩町の二地域でのアンケート調査に基づいて、上記の分析を行なうものである。

2. 分析の枠組み

本稿では、作家の居住地選択行動、居住地環境の評価、今後の定住意向、およびそれらの相互関連や作家の属性との関連について把握する。

作家の属性については、居住地選択行動や居住地環境評価などに影響を及ぼすと考えられる活動分野、年齢、性別、出身地について把握する。居住地選択行動については、例えば自然環境の良さ、原材料の入手のしやすさ、親類の存在など居住地選択

の際に重視した要因を把握する。また、作家が定住を決定する際に、居住地に関するどのような情報を事前に得ていたかは重要であろう。このことが現在の居住地環境の評価や今後の定住意向とも関連しているとも考えられる。そこで、彼らがマスコミや役場などどこからの情報を重視したのかを問うている。これらは、それぞれ複数回答形式で設問している。

居住地環境の評価については、通常の居住環境（自然環境の良さ、公共交通機関の利便性、学校・病院等の利便性）に加え、作家の活動の場として創作環境（自然環境の良さ、原材料の入手、観光客の多さなど）、また外部から転入してきた者にとって重要な近隣関係（地元の方々との交際）についてそれぞれその満足度を問う。さらに、これらの居住環境、創作環境、近隣関係を総合した総合評価についても問うた。今後の定住意向については、転出意向（転出したい、できれば住み続けたいなど）により把握できよう。

以上をまとめれば、表-1のとおりである。ただし、今後の転出意向については転出したいと答える者が2人のみであったので、以降の分析から除外する。

3. 分析

(1) 調査の概要

二地域におけるアンケート調査は、綾町で平成8年7月上旬、志摩町で平成9年6月下旬に訪問留置訪問回収で実施している。回収状況を表-2に示す。綾町の作家の有効回答率が低いのは、もともとの対象地域出身で町外転出経験のない作家を分析対象から除外したためである。

*キーワード：意識分析調査、地域計画、コミュニティ計画

**学生員 宮崎大学大学院工学研究科（宮崎市学園木花台西1-1 Tel.(0985)28-2811 Fax(0985)58-1673）

***正員 宮崎大学助教授 工学部土木環境工学科

**** 宮崎大学工学部土木環境工学科

表－1 アンケートの内容

	質問項目
個人属性	・年齢・性別・活動分野・居住歴
居住地選択行動	・対象地域の情報（マスコミ、役所の広報、知人・友人や家族・親類縁者の紹介など） ・居住地選択要因（自然環境がよい、静かさ、土地の確保しやすさ、原材料の入手しやすさ、知人・友人や親類縁者の存在）
居住地環境の評価	・創作環境（自然環境の良さ、原材料の入手しやすさなど）の評価 ・居住環境（自然環境の良さ、公共交通の利便性、学校・病院などの公共施設の利便性など）の評価 ・総合評価（創作環境・居住環境・近隣環境を総合的に見た評価）
今後の定住意向	・定住意向（住み続けたい、転出したい） ・定住の要因（自然環境がよい、原材料の入手しやすさ、親類縁者の存在など） ・転出の要因（自然環境がよい、原材料の入手しやすさ、親類縁者の存在など）

表－3 個人属性

質問項目	カテゴリー名	綾	志摩
活動分野	陶芸	3(20.0%)	6(75.0%)
	木工	7(46.7%)	1(12.5%)
	その他	5(33.3%)	1(12.5%)
性別	男	15(100.0%)	7(87.5%)
	女	0(0.0%)	1(12.5%)
年齢	20代	1(6.7%)	0(0.0%)
	30代	2(13.1%)	0(0.0%)
	40代	5(33.3%)	5(62.5%)
	50代	6(40.0%)	2(25.0%)
	60代	1(6.7%)	1(12.5%)
出身地	作家が対象地域出身	4(26.7%)	2(25.0%)
	作家が県内出身	6(40.0%)	5(62.5%)
	作家が県外出身	2(13.3%)	0(0.0%)
	作家が対象地域出身	3(20.0%)	1(12.5%)
合 計		15人	8人

表－2 アンケートの回収状況（人）

	配布票数	回収票数	有効票数(%)
綾	26	24	15(62.5%)
志摩	10	8	8(100.0%)
合計	36	32	23(71.9%)

（２）作家の個人属性

回答者の個人属性について表－3に示す。活動分野を見ると綾町の作家の約半数は（15人中7人）が木工芸であり、志摩の作家はほとんど（8人中6人）が陶芸である。年齢層では40、50代が多い（23人中18人）。女性は1人のみである。

また、出身地をみると作家本人およびその配偶者いずれも対象地域出身でない者は半数を超える（23人中13人）。夫婦いずれも県外出身者は2人のみであった。

（３）居住地選択行動

（a）居住地選択要因

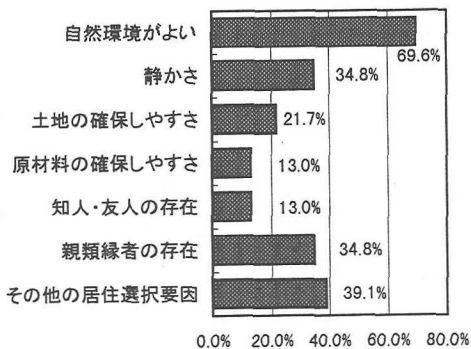
作家の居住地選択要因に対する回答を単純集計したものを図－1に示す。自然環境の良さをあげる者が69.6%（23人中16人）と最も多い。また、土地の確保のしやすさや親類縁者の存在などを重視している者も多い。このうち、土地の確保のしやす

さについて、たとえば綾町のように⁵⁾行政が関与しうる余地があると考えられる。

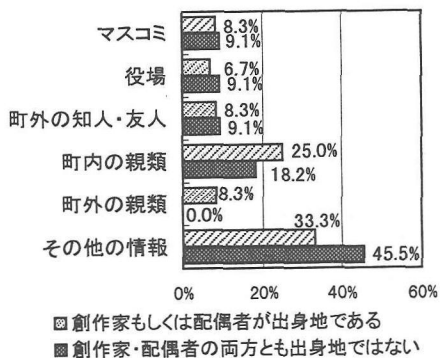
また、創作活動を営むための原材料の確保のしやすさをあげる者は13.0%（23人中3人）と比較的少ない。この3人の活動分野は、いずれも木工芸の者であった。すなわち、木工芸の作家の37.5%（8人中3人）は、原材料の入手のしやすさを重視しているといえる。これらのことから、自然環境がよい地域であれば、作家誘致の可能性があるが、この際木工芸の作家については注意が必要ということが推察できる。

（b）情報源

図－2に、作家が居住地を選択する際に重視した項目を示す。ただし、たとえば親類からの情報は、地元には血縁・地縁があることと関連が深いので、作家の出身属性とあわせて示した。図より、作家全体で見ると町内の「親類」からの情報が21.7%（23人中5人）と多く、次いで「役場」の情報と回答する者が13.0%（23人中3人）と多い。この



図－１ 居住地選択要因



図－２ 情報源

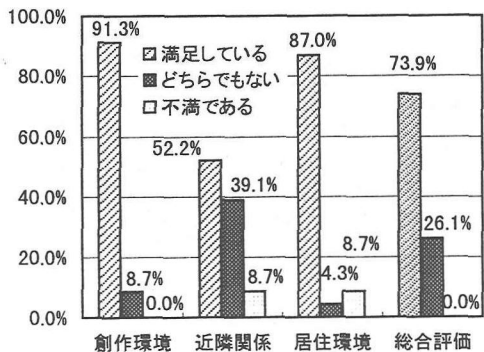
うち情報源が「役場」の者はすべて綾町の創作家である。これは、綾町のみ行政が積極的に情報提供を行なっていることに関連する。行政による情報提供は創作家の居住地選択に有効であるといえよう。全体的にみれば、出身地による情報源の違いはさほどないと考えられる。

(4) 居住地環境の評価に関する分析

居住地の環境評価に関する単純集計の他、居住地環境の評価と創作家の属性や情報源との関係について分析する。紙面上の都合上、行政の誘致施策の有効性を考える際に重要な出身地について分析する。

(a) 居住地環境の評価

現在の居住地環境の評価の状況を図－３に示す。創作環境の評価や居住地環境の評価、総合評価で満足である者はそれぞれ 91.3% (23 人中 21 人)、87.0% (23 人中 20 人)、73.9% (23 人中 17 人) と高い。しかし、近隣関係の評価では 52.2% (23



図－３ 居住地環境の評価

人中 12 人) と低い。また、不満に着目すれば、創作環境の評価と総合評価では存在せず、近隣関係の評価と居住環境の評価では双方とも 8.7% (23 人中 2 人) が不満を表明したのみであった。総合評価では、満足している者が多いことから、近隣関係は深刻な問題ではないといえる。このことは、近隣関係については、住民との交流の促進ということを考えると重要な問題であり、地域活動のなど行政が関与できる余地もあると考えられる。

(b) 居住地環境の評価と要因

創作家の出身属性および、居住地選択の際の情報源と居住地環境の評価の関係を把握するために、創作家の回答パターンによる回答カテゴリーの分類を数量化Ⅲ類およびクラスター分析を用いて行なった。

居住地環境の評価と創作家の出身地についての分析結果を図－４に示す。居住環境、創作環境、近隣関係および総合評価において「満足している」は、「創作家が対象地域出身」や「創作家が県内出身」、「配偶者が対象地域出身」と同じクラスターに分類されている。また、居住環境の評価において「不満である」は、「創作家が県外出身」と同じクラスターに分類されている。このことから、創作家が地域と何らかの関係をもっていた場合の評価はよく、もっていない場合の評価は悪くなっているといえる。

居住地環境の評価と情報のについての分析結果を図－５に示す。居住環境、創作環境、近隣関係および総合評価において「満足している」は、「役場」、「町外の友人」、「その他の情報」と同じクラスター

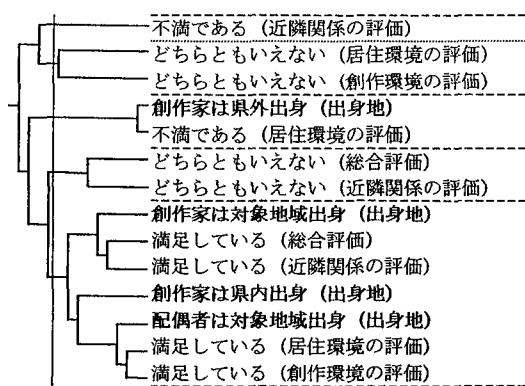


図-4 情報源と居住地環境の
評価のクラスター樹形図

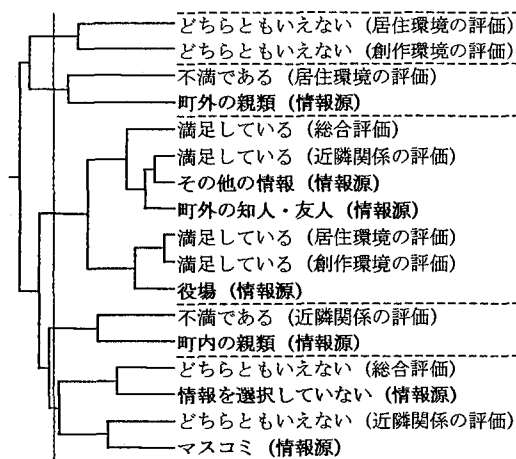


図-5 出身地と居住地環境の
評価のクラスター樹形図

に分類されている。また、居住環境の評価において「不満である」は、「町外の親類」と同じクラスターに分類され、さらに近隣関係の評価において「不満である」は、「町内親類」と同じクラスターに分類されている。このことから、「役場」や「町外の友人」は情報源として有効であるといえる。また、「町内の親類」をあげた者は逆に地域とのつながりの強さにおいて、近隣関係に不満を抱いていると考えられる。

4. おわりに

本研究は、農山村地域において作家の誘致しようとする際の要点を明らかにするために、対象地域の情報源、作家の居住地選択要因、移住後の評価について分析したものである。その結果、以下のことがわかった。

1) 多くの作家は居住地選択要因で自然環境を重視している。原材料の入手のしやすさを重視する者は少なく、重視する者は木工芸の一部の作家であった。このことから、他の自然環境のよい農山村地域では作家を誘致できる素地はあるといえる。

2) 作家の居住環境の評価や創作環境の評価に比べ、近隣関係の評価はさほどよくない。総合評価がよいことから深刻な問題ではないが、近隣関係の円滑化はその重要性から行政的にも工夫が必要と考え

られる。

3) 役場から居住地選択の際の情報を得た者は、居住地環境の評価がよい傾向がある。このことから、行政の積極的な情報提供の有効性が指摘できる。

ただし、今回の分析は限られたサンプル数のもとで行なったため、今後はより多くの作家を対象として統計的分析を行なう必要があることはいうまでもない。

《参考文献》

- 1) 倉員圭子ほか：農村で定住する作家と地域コミュニティの関係に関する基礎的研究、土木計画学研究・講演集 19(2)、pp.597-600、1996。
- 2) 高村恵多ほか：住民と地域外部者との交流と作家の居住について、土木学会第 52 回年次学術講演会講演概要集、第 4 部、pp.87-90、1997。
- 3) 高村恵多ほか：農村に定住する作家と地域コミュニティとの交流に関する研究、土木計画学研究・講演集 20(1)、pp.87-90、1997。
- 4) Tetsunobu YOSHITAKE, et.al.: Role of Local ArtistS in Enhancing Community Development in Aya, a local town in Japan, Regional &Urban Development Conference,Newzealand,1997。
- 5) 宮崎県：昭和 55 年度工芸コミュニティ調査報告書「手作りの里・綾」発展計画、1981